

山梨県立大学

【医療】

山梨県の女子学生におけるがんおよび子宮がん検診のイメージと検診をためらう理由

○前澤美代子 高岸弘美（山梨県立大学看護学部）

【今後の展開 商品イメージ応用できる分野】

“検診に行かない”を、“検診に行ける”へ変える仕組みづくり

I. 背景

- 山梨県の令和2（2020）年の総死亡者数9,796人のうち、がんによる死亡者は2,433人
→全死亡に占める割合は24.8% 全体の約4分の1を占めている。
- 全がん進行度別5年相対生存率において、限局がんは、全国92.4%、山梨県94.1%
→限局でがんが発見されれば、9割を超える人が5年以上生存している。
- 一方、遠隔転移の状態で発見された場合は全国15.7%、山梨県15.1%であり
→5年以上生きることが出来る人は2割にも満たない状況

II. 目的

山梨県の行政と本大学との連携において、子宮がん検診の対象年齢にある20歳以上の女子学生を対象に、がんおよび子宮がん検診に対する不安とイメージを明らかにし、子宮がん検診の受診率向上にむけた仕組みづくりへの示唆を得る目的で取り組んだ。

III. 方法

1. 研究デザイン 観察研究

2.対象 山梨県内の大学及び看護専門学校の女子学生600名

3.データ収集方法

各施設長の許諾を得た後、担当者窓口の者から、女子学生に対してメールの文面のアンケートのお願いの依頼文とQRコードおよびURLを添えて配信してもらった。そのQRコードまたはURLからスマートフォンを活用してアンケートに答えてもらい、回収した内容をデータとした

IV. 結果

山梨県内の大学および看護学校の女子学生の合計600名中、回答が得られたのは477名だった。（回答率79.5%）

看護系の学生 47%

看護系以外の学生 53%

図 子宮頸がんワクチン接種の有無

■ 受けた

■ 受けていない

■ わからない

図 子宮がん検診

がんに対するイメージを教えてください。

子宮がん検診に対するイメージを教えてください。

■ 全く思わない

■ あまり思わない

■ そう思う

■ とてもそう思う

図 がんに対するイメージ

■ 全く思わない

■ あまり思わない

■ そう思う

■ とてもそう思う

図 子宮がん検診に対するイメージ

V. 考察・結論・展望

子宮がん検診の体験者は、痛みや羞恥心を訴えていた。これらの対応として、看護師や助産師の声かけや手を握ってくれたことで不安の軽減につながっていたことから、子宮がん検診における医療者の対応を強化していく必要があることが示唆された。

また、「めんどろ」という要因が子宮がん検診のバリアとなっていた。これに対しては、人は知識があっても行動するとは限らない、知識から納得や感動などのフィードバックが動機となり行動に移すとされている。行動変容を促すような仕組みの必要性が示唆された。

さらに、がんや子宮がん検診に対する講義や研修の受講歴のない学生に対して、適切な情報を届ける仕組みづくりについても県と対話を繰り返し、女子学生の受診行動につながる体制を検討していく必要性が示唆された。

本研究は2023年山梨県立大学地域交流センター事業の地域課題研究として研究助成費をいただいで実施した。